

邦楽調査掛による長唄の五線譜化 ——事業の実態と再評価——

大久保 真利子

邦楽調査掛（1907-1943？）は、日本音楽の調査と保存とを目的として設立された官立の機関である。邦楽調査掛の活動概要は『東京芸術大学百年史』で知ることができるが、ある特定の事業を詳細に読み解くには、さらなる調査が必要となってくる。そこで本稿ではいまだ研究のない長唄の五線譜化に焦点をあて、まずは五線譜化された曲や関係者などといった事業の実態を解明する。

つぎに取り組むのは、事業に対する評価の再確認である。言説などから長唄五線譜化の意図をさぐった結果、本事業は、既存の曲を五線譜化するだけではなく、五線譜を基盤とした長唄の調査研究もめざしていたことがあきらかとなった。

キーワード：囃託員、津田タミ（杵屋君繁）、めりやす

はじめに

明治40（1907）年に東京音楽学校内に設立された^{ほうがくちょうさかかり}邦楽調査掛は、日本音楽の調査と保存を目的とした官立の音楽専門機関である。同掛では『近世邦楽年表』の編纂と刊行、演奏会の開催などのほか、全17種目⁽¹⁾の日本音楽を五線譜化する事業がおこなわれた。

近年、邦楽調査掛に関する資料開示と関連研究がすすめられている。たとえば、『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』（百年史2003⁽²⁾。以下、『百年史』）の「邦楽調査掛」（百年史2003：553-649）の項目や、塚原康子による「邦楽調査掛関係資料の調査について」（塚原2008。以下、塚原資料）などである。これらの資料により長唄五線譜化の概要はつかめるようになったものの、各事業の細かな部分を把握するには至っていない。そこで本稿は、いまだ先行研究のない長唄の五線譜化に焦点をあて、事業の実態を詳細に把握するとともに、長唄五線譜化の再評価をおこなうものである。

研究の方法は以下のとおりである。実態の解明にあたっては、『百年史』と「塚原資料」とを整理し、そこに調査によって判明した事実を追加することによって、長唄五線譜化の実態を提示する。その際、五線譜化に関する他種目の研究（薦田1982および寺内2003）を参考にした。次いで事業の評価について確認するのだが、まずは関係者による雑誌記事や議事録などから事業の意義をさぐる。そして事業の実態と意義とをふまえたうえで、長唄五線譜化の事業全体の再評価を試みる。

1 長唄五線譜化の実際

1-1 事業の概要と資料紹介

まず事業の概要について述べる。長唄の五線譜化は明治40(1907)年11月から始められ、昭和3(1928)年3月まで、途中3年の中断を含みながらのべ19年間おこなわれた。これは五線譜化された全17種目中、最長である。ほとんどの場合、東京音楽学校内の「調査室」において、週1回3時間程度の調査が実施された(百年史2003:556)。そこには長唄演奏家と記譜の担当者とが同席し、演奏がその場で五線譜に書きしるされた。本稿においては、五線譜化のための規範演奏をつとめた長唄演奏家のうち、邦楽調査掛の嘱託員として雇い入れられていた人物を「演奏家嘱託員」、その演奏を五線譜化した人物を「記譜者」とよぶ。

ところで邦楽調査掛がいう長唄の範囲について確認しておきたい。同掛は、現在わたしたちがいうところの長唄と下座音楽、その両者を含めた広い範囲の音楽を長唄としている。下座音楽の呼称には「劇場用合方」、「芝居用合方」、「劇場合方」などがあり、それらは区別なく用いられている。本稿においては、もっとも出現の多い「劇場用合方」で統一する。劇場用合方の五線譜化は相当の成果をあげている⁽³⁾。しかし本稿作成時点では、未公開である。そこで本稿においては、劇場用合方を含まない狭義の長唄を研究の対象としたい。

さて長唄五線譜化の活動実態の把握に先立ち、資料を公刊資料と未公刊資料とに大別し、本稿における活用法を提示する。公刊資料には『百年史』と「塚原資料」とがあり、『百年史』のなかでとりわけ重要なのは、595～701頁の「採譜」、581～619頁の「調査報告書」の項目である。これら二つについては、そこに記された情報を整理することを主眼とする。また東京芸術大学附属図書館に所蔵されている未公刊資料4点(「日誌」「出勤簿」「邦楽外題」「調査済外題目録」)も参照する。たとえば「日誌」⁽⁴⁾は五線譜化の動向がもっとも詳細に把握できる資料である。日誌で確認できた作業回数は、劇場用合方を含めた長唄が568回、そのうち狭義の長唄が269回であった。ただし作業予定日でありながら作業をおこなわなかった日の書き込みを含めると、長唄に関する日誌の書き込みの回数は1,000回を越える。また、常勤・非常勤を問わず関係者の出欠を記したものに「出勤簿」⁽⁵⁾がある。出勤簿では、採譜調査に協力した日だけでなく、会議や演奏会への出演なども確認することができる。そのほか、五線譜化に取り組みられた楽曲名や付帯情報などを知ることができる「邦楽外題」⁽⁶⁾や「調査済外題目録」⁽⁷⁾なども用いた。これらの未公刊資料から得た情報のうち、筆者調査によってはじめてあきらかとなった事柄については、積極的に公開してゆきたい。

1-2 調査結果

前項で挙げた資料をもちいて、長唄の五線譜化の実態解明をこころみた。本稿において実態としてとらえるものには、誰が、どのような長唄曲を、何年頃に五線譜化したのかなどの情報がある。それらについて曲目を軸にして、五線譜化開始の順番に整理したものが表1である(本稿末参照)。実態をつかむために使用した曲ごとの資料は、「掲載書」欄にしめしたとおりだが、各資料の記述内容を精査すると、多少の齟齬がみられるものもあった。そこですべてを比較検討し、筆者がもっとも妥当だとかんがえる情報を選び出して記載した。

この表の特徴は、現存・非現存の別なく五線譜化された長唄曲をすべて同一にあつかい、横軸で曲ごとの情報が、縦軸でどのような順番で五線譜化がはじめられたのかを把握できる点にある。つ

まりこれまで断片的にしかわからなかった長唄五線譜化の実態が、時系列に沿ってとらえられるようになったわけである。

次節では表1をもとにしながら、長唄の五線譜化を知るうえで特筆すべき事柄と特徴を抽出する。

2 事業の特徴

2-1 演奏家嘱託員

はじめに演奏家に注目する。表1の「演奏家」の欄をみると、長唄の五線譜化に協力したのは、五世杵屋勘五郎（1875-1917）、初世杵屋五三郎（1889-1939）、二世今藤長十郎（1866-1945）、六世六合新三郎（1859-1927）、三世杵屋六四郎（1874-1956）、津田タミ（生没年未詳）の6名だということがわかる。このうち演奏家嘱託員として邦楽調査掛に雇い入れられた演奏家は、津田を除いた5名である。本項ではこの5名を中心とした、長唄における演奏家嘱託員について述べる。

表2は『百年史』をもとに、長唄における演奏家嘱託員の在籍期間など一覧にしたものである。五線譜化に協力した5名のほかに、十三世杵屋六左衛門、四世松永和風、四世吉住小三郎の3名も在籍していたことがわかる。これら3名は、邦楽調査掛主催の演奏会主演や会議への出席など、演奏家嘱託員に課せられた五線譜化以外の業務には参加していたようである。

表2 長唄の演奏家嘱託員

芸名	担当	職名	期間(年度)	備考
五世杵屋勘五郎	長唄	調査嘱託	明治40年～大正3年	明治40年10月29日就任
初世杵屋五三郎	長唄		明治41年～明治44年	代理出勤
十三世杵屋六左衛門	長唄	調査嘱託	明治45年～大正3年	明治44年9月29日就任、演奏会出演
二世今藤長十郎	長唄	調査嘱託 調査員	明治45年～大正5年 大正6年～昭和16年	明治44年10月11日就任
六世六合新三郎 ⁽⁸⁾	長唄 囃子	調査嘱託 嘱託員	大正2年度～大正5年度 大正6年度～大正15年度	大正2年12月5日初出
四世吉住小三郎	長唄	調査嘱託 調査員	大正4年～大正5年、 昭和4年度 大正6年～昭和2年、 昭和5年度～昭和16年度	大正3年11月18日就任、演奏会出演
三世杵屋六四郎 稀音家六四郎	長唄	調査嘱託 嘱託員	大正3年～大正5年 大正6年～昭和16年	大正3年11月18日就任、演奏会出演
四世松永和風	長唄	嘱託員	昭和3年～昭和16年	昭和3年11月5日就任

(百年史 2003 : 746-749 および 1545-1579 をもとに筆者作表)

ここで五線譜化に参加した5名の嘱託員について補足しておく。表2において、初世杵屋五三郎の職名が斜線になっているのは、五世杵屋勘五郎の代理としての出勤であり、正式な嘱託員ではなかったからである。また六世六合新三郎は、下座音楽を専門とする演奏家である。長唄の五線譜化の場に時々参加しているが、つねに二世今藤長十郎をともなっており、六合は補助的立場で参加したものと推測される。そして三世稀音家六四郎^{むちざくらうさのみでぐら}についてであるが、調査予定日においても欠席する機会が多く、《鞭櫻宇佐弊》^{むいよ}と自作曲の《御代の秋》の五線譜化への関与があきらかになっただけで

ある。

これらのことより、長唄五線譜化に協力した演奏家嘱託員は5名のうち、大きな役割を担った人物は、事業開始から明治年間においては五世杵屋勘五郎、大正および昭和年間においては二世今藤長十郎であるといえる。

2-2 嘱託員以外の長唄演奏家

邦楽調査掛において長唄の五線譜化に協力した演奏家は、演奏家嘱託員だけではなかった。

はじめに、実際に五線譜化に協力した者として、津田タミ（たみ子）がいる。『百年史』や「調査済外題目録」などで、名前だけは確認できるが、詳細不明の人物であった。筆者調査によれば津田タミは、芸芸上の名前を杵屋君繁（世代、生没年未詳）という。杵屋君三郎（世代、生没年未詳）を師とし、明治43（1910）年から昭和6（1931）年まで京都の先斗町で「江戸唄教師」をしていたことが確認できた（中神鹿1910、中神直1931）。つまり記譜者が京都に赴いた大正6～7（1931～1932）年頃のタミは、先斗町を代表するほどの長唄の技量を身につけており、経験も十分に積んだ演奏家だったとかがえられる。

タミからは《枕獅子》《常磐庭》《蕨入娘》の計3曲を五線譜化しているのだが、いずれも京阪神のみに伝わるめずらしい長唄曲ではない。当時東京でも演奏できる者は必ずいたとかがえられる。記譜者が京都にまで赴いてまでタミの演奏を五線譜化した理由は何だったのだろうか。この疑問に関しては、次節において考察をくわえる。

また、「調査済外題目録」には、「菅野吟平様方の亡母の知れるもの（長唄）」という記述とともに、合計五つの長唄曲の書き込みがあった。菅野吟平（西山亀助・西山吟平、1875-?）は、一中節（菅野派）の演奏家で、演奏家嘱託員でもあった。長唄曲のなかには《かむろの三番叟》や《蛭狩》など、現在は伝承の絶えているものが含まれていた。このことは『百年史』などにはまったくしてらさず、今回「調査済外題目録」の管見をとおしてはじめてあきらかとなった事柄である。この五線譜化は実現しなかったものの、邦楽調査掛が稀曲などを知る演奏家をあまねくさがしていた様子がみとれる。



図1 津田タミ
(中神鹿 1910)

2-3 記譜者

次に記譜者について述べる。表3は『百年史』から、記譜者全12名を抽出し列挙したものである。

表3 長唄の採譜調査に関係した記譜者

氏名	職位	在職期間	備考
鎗田倉之助	調査補助	明治40年	明治40年9月17日就任
三宅延齡	調査補助 調査嘱託 嘱託員	明治41年度～明治44年7月10日 明治44年7月10日～大正5年度 大正6年度～大正11年度	明治40年10月1日初出勤
林蝶	調査嘱託	明治41年度～明治42年度	明治41年2月8日就任
本居長世	調査補助 調査員（助教授）	明治41年4月10日～明治42年度 明治43年度～大正5年12月27日	明治41年4月10日就任 大正5年12月27日退任

楠美恩三郎	調査員（助教授） 調査員（講師）	明治41年度～大正5年度 大正6年～大正7年	大正6年1月13日就任 大正8年3月31日解任
前田久八	調査員（助教授） 嘱託員	明治42年度～大正9年度 大正10年度～大正12年度	大正12年11月1日解任
竹内平吉	調査補助	明治43年～大正2年	明治43年4月13日就任 大正2年3月31日解任
小原知孝		明治43年6月16日～大正2年3月31日	記譜応募者
竹内鑑三		大正3年	記譜応募者
弘田龍太郎	調査補助 嘱託員（講師） 調査員（助教授）	大正4年度～大正7年度 大正8年度～大正9年3月1日 大正9年1日～昭和2年度	
北村季晴	嘱託員	大正6年9月25日～大正12年11月1日	大正6年9月25日就任 大正12年11月1日解任
梁田貞	調査補助 嘱託員	大正8年9月10日～大正8年度 大正9年度～昭和2年度	大正12年11月1日解任

（百年史 2003：746-749 および 1545-1579 をもとに筆者作表）

記譜者のほとんどが東京音楽学校の卒業生であるが、例外的に「記譜応募者」の小原知孝と竹内鑑三（いずれも生没年未詳）が含まれている。「記譜応募者」についてはまだ不明な点も多いが、邦楽調査掛が五線譜採譜のスタッフを学外に求めたとかがえられる⁽⁹⁾。

このうち実際に長唄の五線譜化に携わったのは10名である。平曲の五線譜化で重要な役割をはたした楠美恩三郎（1868-1927）と、記譜応募者の竹内鑑三以外は、「日誌」などの資料によって、長唄の五線譜化の場に立ち会ったことがあきらかとなった。このように長唄においては多くの記譜者が関わっており、1回の調査に複数の記譜者が同席する場合も少なくないのだが、そのなかで実際に五線譜に書きしるす者はかぎられていたようだ。そのため表1の記譜者の欄には、実際に五線譜に書きしるしたことが判明した者のみ「*」の印をつけた。

ここで長唄の記譜者のうち、長唄において重要な役割をはたした本居長世（1885-1945）について言及しておく。本居は記譜者のなかで最長の9年間、長唄の五線譜化にたずさわっていた。東京音楽学校の学生だったころは「きねやさん」というあだ名をつけられるほど、長唄に精通した人物であった（金田一 1983：78）。そういう素養がみとめられたのであろうか、本居は長唄に関する調査や研究の責任者の立場にあったようである。たとえば、明治43（1910）年9月からはじまった「専門分担」という制度において本居は長唄の担当に任命されている（百年史 2003：640、湯原 1911：56）。「専門分担」とは、いわば各種目における記譜者のなかの責任者のようなもので、本居と同じ時期に、劇場用合方を竹内平吉（1887-1972）が担当することになった。竹内平吉が大正2（1913）年に解任されたあとは、長唄、劇場用合方ともに、本居が「専門分担」となる（百年史 2003：659）。ちなみに本居は大正3年の時点で、「本居氏を楽曲の調査研究上の統一及び各種取扱い上の主査となす」（百年史 2003：659）とされており、長唄だけでなく五線譜化事業全体を統括する役割も担っていたようだ。また後述するが本居は、長唄の曲種のひとつであり歌詞が比較的短く平易な独吟曲「めりやす」の研究の担当者にもなっている。

先行研究のある平曲と雅楽においては、記譜者がきわめて限定されていたのに対し⁽¹⁰⁾、長唄の五線譜採譜には多くの記譜者が関わっていた。もっとも平曲や雅楽よりも長期間取り組まれた分、関与した人物が多いことは必然であろうが、長唄の音楽そのものが比較的採譜しやすいことも多くの記譜者が関与した要因の一つかもしれない。

2-4 現存する長唄五線譜

ここからは、五線譜化された長唄の楽曲に着目する（表1の「曲目」欄参照）。

現在、邦楽調査掛において作成された五線譜は、東京芸術大学附属図書館に所蔵されている⁽¹¹⁾。塚原資料（塚原 2008）をもちい、その情報を整理すると、現存する長唄五線譜は44曲78点であった（表1「現存の有無」欄が「有」となっている曲を参照）。

現存譜の点数が曲数よりも多いのは、同一曲に数点の五線譜が残っている場合があるからである。たとえば《小夜千鳥》においては、ペンで浄書された稿が2点、鉛筆書の稿が2点、同じく鉛筆書の未完成稿が1点、合計5点も現存している（ペン書き稿については図2参照）。内容的にはほぼ同じとおもわれるペン書き浄書稿が2点存在する理由は、「邦楽調査報告」に述べられた、五線譜化が終了したら主事の審査を経て「正副二通を浄書して之を保存す」という規定に沿ったものであろう（百年史 2003：556-557）。

これら44曲78点の譜のほとんどは、塚原資料において「キーワード」が「長唄五線譜」もしくは「長唄五線譜原稿」である。ただしキーワードに「長唄」を含まないものにも長唄曲が混じっていることがわかった。具体的には「古浄瑠璃五線譜」とされているもののなかに、《鞭櫻宇佐弊》が紛れているのである。また《勧進帳》と《京鹿子娘道成寺》については、塚原資料におけるキーワードが「雑集」とされている「カ・リ（原稿）」のなかに、譜の一部がおさめられていた。この「カ・リ」という楽譜は、導入部分という意味をもつ「カカリ」のみを集めたもので、長唄《勧進帳》12例と《京鹿子娘道成寺》10例のほか、清元《浅間》や河東節《ぬれ扇》など、合計7種目、26曲のカカリが収録されている。またこのような幾種目もの旋律型をあつめた楽譜としては、「カ・リ（原稿）」のほか「オトシ、ナガシ」がある。長唄では《鷺娘》の終止形9例が所収されている。これら《勧進帳》《京鹿子娘道成寺》《鷺娘》は、部分的に五線譜化がのこされていることから、表1の「現存の有無」の項目においては、「有（部）」とするしておいた。

このように現存資料については塚原資料に拠るところが大きいのだが、注意すべき記載項目もある。それはキーワードが「三味線五線譜」の《越後獅子》である。塚原資料には「人名」の欄に「杵屋六左衛門（九代）[作曲]」とある。たしかに長唄《越後獅子》なら九世杵屋六左衛門の作曲だが、楽譜をみると長唄《越後獅子》ではなく、地歌《越後獅子》であることが確認できた。また当該の譜のどこを見ても「杵屋六左衛門（九代）[作曲]」との文字が見当たらない。誤記とおもわれるので、今後塚原資料をもちいる際には注意が必要であろう。

2-5 所在不明の長唄五線譜

邦楽調査掛で五線譜化された長唄曲は、現存するものばかりではないようだ。現存していないが五線譜化されたであろう長唄曲が11曲あることが



図2 《小夜千鳥》ペン書き稿

あきらかとなった（表1「現存の有無」欄が「無」となっている曲を参照）。

譜が現存していない曲についても、さまざまな資料を勘案することにより、ほとんどの曲において五線譜化の実態があきらかになった。ただし《えびす》と、曲名の同定が難しい「ばんぜいせんしうまいおさめ…」という曲については、手がかりとなる情報があまりにも少なすぎるため、現段階では詳細不明と言わざるを得ない。

また、部分的に譜が残されている《勸進帳》と《京鹿子娘道成寺》については、実際には曲全体が五線譜化されていたことが判明した。とりわけ《勸進帳》について言えば「調査済外題目録」において「及延年舞」や「上ちうし」といった書き込みがみられ、曲のあらゆる要素まで調査が及んでいることがわかる。また「日誌」にみられる作業回数も、《勸進帳》が23回、《京鹿子娘道成寺》が40回と、長唄のなかでもとくに時間をかけて五線譜化に取り組まれている。長唄五線譜のなかでもっとも詳細に描き込まれたであろう《勸進帳》が現存しないのは、非常に残念である。

2-6 弘田龍太郎による「再調査」

実態解明の最後に、記譜者の弘田龍太郎（1892-1952）が昭和2（1927）年から3（1928）年にかけておこなった作業について述べる。前述のように、長唄には大正13（1924）年から昭和元（1926）年まで、五線譜化中断の期間があるのだが、昭和2年1月から、当時唯一の記譜者だった弘田龍太郎の強い意志により再開された。弘田が大正13年9月29日に当時の掛長村上直次郎（1868-1966）に提出した文書の一部分を引用する。

種々先輩の手によりてなされました楽譜は山積して居りまして、之を一見しても先輩の努力は思いやられます。然るに鉛筆のみで記されてインクで記されて居ないものが、未だ約二千余頁もありまして、之は速にインクで写して置かねば間もなく磨滅して消え失せます。不明の点は各派の調査嘱託にきゝ、是非インクで写して置く必要があります（百年史2003：580）

弘田による五線譜化は、「再調査」といわれている。その作業内容は、ほとんどが鉛筆書きのままにしてある楽譜をペン書きするという「浄書」の作業で、必要に応じて演奏家嘱託員同席のもと、新たに五線譜化する場合もあったようだ。長唄において弘田が「再調査」した曲は10曲である（表1「記譜者」欄において「弘田」の書き込みがある曲を参照）。そのうち、当時演奏家嘱託員だった二世今藤長十郎が同席したのは、《英執着獅子》《高尾懺悔》《吉原雀》《童獅子》の4曲である。これらの楽譜については、弘田によってあらたに五線譜化された部分を含んでいる可能性がたかといえる。

弘田は長唄のほかには9種目の「再調査」に尽力しており、富本節と一中節（都派、菅野派）については、すべての譜の浄書が完了したとされている（百年史2003：696-697）。また弘田は、のこされた五線譜をもちいた日本音楽研究の必要性を痛感していたようである（弘田1927：5-6）。先行研究のある平曲と雅楽については、弘田による再調査の対象ではなかったためこれまで言及されることはなかったが、邦楽調査掛の最後期において多大な業績をのこした重要人物として、今後弘田に注目した研究がおこなわれるべきかもしれない。

3 長唄五線譜化の意図

3-1 問題設定とめりやすの五線譜化

前項までで、演奏家や五線譜化するスタッフの協力によって、多くの長唄曲が五線譜化されたことがわかった。それでは、長唄の五線譜化はどのような意図をもっておこなわれたのであろうか。

そもそも邦楽調査掛は、「日本音楽の調査と保存」を目的としていた。しかしこれまで五線譜化に関しては、保存の側面ばかりが取り上げられてきたようにおもう。たとえば、「東京音楽学校の方でも、邦楽調査をやっているが、調査と云う名の実は保存です。構わずに置けば廃絶して終い相な^(ママ)古い唄の節までも調べて譜にして置こうと云うのだ」(乙骨 1912:51) というものや、「邦楽調査係では、邦楽を写譜し、保存されることはきいて居るが何等それを材料として活用し、邦楽の振興策を講ぜられると云うことをきかぬ」(吉田 1921:2) などである。つまり五線譜化の事業は、五線譜をもちいて楽曲を保存する意味合いが強く、調査や研究の要素は皆無であるといわんばかりの評価である。

たしかに五線譜そのものをみても、歌唱パートと三味線パートの旋律と歌詞などが書きしるされているだけで、五線譜上から調査研究の要素をうかがい知ることはできない(図2参照)。そこで本節においては、関係者による言説や議事録などをもとに長唄五線譜化の意図をさぐる。そのうえで長唄五線譜における調査と保存の側面を見だし、事業全体の再評価につなげたい。なおここでの研究対象は、現存の有無にかかわらず五線譜化されたすべての長唄曲(57曲)とする。

まずは長唄五線譜化における具体的な作業進捗の報告から、五線譜化の意図をみてみよう。

一方に於ては以前盛んに劇場に用いられ、且つ所謂江戸長唄と其實質上に於て重大なる関係を有するものの如くにして現時頗る衰頹せる「めりやす」の調査に大に力を注ぎ、此方面に於て得る所少なからざりしと共に、「七福神」の如き江戸長唄としては最も古しと云はるるもの、或は「英執着獅子」「京鹿子娘道成寺」の如き、或は「勸進帳」の如き代表的なる名曲を調査し(後略)(無記名 1910:27)

この報告書提出の時期までに「調査」つまり五線譜化に着手した曲種は主として、①めりやす、②古い長唄曲、③長唄のなかの代表曲であることが報告されている。そのうち、報告書作成の段階においてもっとも重要視していたのは、①めりやすの五線譜化である。表1の備考欄の「めりやす」に注目しながら五線譜化の実際を確認してみると、この記事が出される明治43(1910)年2月までに取り組まれた曲は、《明の鐘》から《末廣狩》までの28曲で、そのうち17曲までがめりやすなのである。長唄全体をとおしてみると20曲のめりやすが五線譜化されており、ひじょうに多くの成果をあげていることがわかる⁽¹²⁾。

めりやすの五線譜化に力がいれられた理由は「現時頗る衰頹せる」という点にあるとおもわれる。事業開始当初から、事業全体を貫く方針として「先ず廃滅せんとする楽曲を調査する」(百年史 2003:554)ことがうちだされており、その方針に該当する長唄の曲種がめりやすだったのである。つまり五線譜上に書きしるすことにより、楽曲の保存をこころみたと見える。

また、めりやすに関しては「得る所少なからざりし」とされているが、これは多くのめりやす曲を五線譜化したというだけでなく、めりやすそのものを対象とした研究が、この時期すでにすめ

られていたことをうかがわせるものである。たとえば明治 42 (1909) 年 10 月 26 日の会議での議題「メリヤスの研究」においては、研究主任者の本居長世によって、以下の報告がなされている。

1. メリヤスは三下りを本体とする事。
1. 大抵は 74 小節乃至 150 小節より成る。
1. 劇場用と否らざるものとは区別ある事。(百年史 2003 : 632)

このように、五線譜化に着手したことによって得られたであろう情報が、「メリヤスの研究」の一部を成しているのである。このことより、邦楽調査掛はただ機械的に五線譜化したのではなく、そこからめりやす曲の特徴を抽出するなど、五線譜化を基盤とした調査研究が実際におこなわれていたといえるだろう。

また②古曲と③代表曲については、五線譜化すべき曲を選定する段階において調査や研究が加えられていたことが確認できた。当時、長唄曲に関して体系的な研究がまだなされていない時代である。邦楽調査掛はまず長唄各曲の初演年代などを調査し、そこで長い歴史をもつものから順に五線譜化する方針を打ち出している(百年史 2003:629、明治 42 年 5 月 25 日議事録)。そこでもっとも古いとされた《七福神》は、会議翌月から実際に五線譜化がはじめられた。そして代表曲についても、会議において各種目の代表曲の選定がおこなわれた(百年史 2009 : 628、明治 42 年 5 月 18 日議事録)。このように五線譜化のための選曲の妥当性については、実際に五線譜化の作業に関与しない第三者も含めた会議の場で議論され、実際の五線譜化に反映されていたといえる。

3-2 五線譜をもちいた音楽的研究をめざして

つぎに紹介する言説からは、めりやす曲の研究のほかにも、調査や研究の計画を知ることができる。

邦楽の歴史を科学的に研究するの外、邦楽の地方的伝播の現在を調査するの必要あり。例えば同一長唄の地方的分布を調査し其の系統を明かにし、尚其の上に之が源流の異同を弁正せば、是れに依りて音曲が其の伝播の際に受くる影響の如何なるものなるか少くも其の大体を想像し得らる(湯原 1908 : 13、句読点筆者補足)

「囑託員以外の長唄演奏家」の項でも紹介したように、京都在住の津田タミ(杵屋君繁)からは、東京でも聴くことのできる長唄曲を五線譜化していた。この意味を上記の言説と照らし合わせてみると、東京と京都での長唄曲の音楽的差異を研究する目的があったことがうかがえる。

このほか、種目の垣根を越えた調査研究の試みも確認することができた。他種目における言説例になるが、清元節に関する進捗報告のなかに「『浅間』の比較研究の為に『初霞浅間嶽』をも採れり」(無記名 1910 : 27)という記述がある。日本音楽には「浅間」の題名を冠した曲がいくつもあがあるが、そのうち邦楽調査掛では、一中節都派の《傾城浅間嶽》、一中節野昔派の《夕霞浅間嶽》、富本節の《其梯浅間嶽》が五線譜化されている。つまり同じ題名をもつ曲に共通性や差異を見だし、さらには各種目の音楽的特徴を導き出すねらいがあったとかがえられる。このような同名異曲の採譜例を長唄においてみると、《四つの袖》と《ゆかりの月》は長唄と京唄(今日という地歌)で、《高尾懺悔》は長唄、富本節、荻江節で五線譜化されている。

各種目の音楽的特徴を抽出することは、現在においてもまだ達成されていない大きな課題である。同名異曲に着目し、その課題に取り組む足がかりとして旋律や歌詞を五線譜化したことは、日本音楽の研究に五線譜をもちいた先駆的事例として評価されるべきである。

3-3 長唄五線譜化に対する再評価

ここでは本節をまとめるとともに、長唄の五線譜化全体における再評価をこころみる。

言説などをもちいて長唄五線譜化の意図をよみとった結果、たとえばめりやすは、廃滅を防ぐことを目的として、五線譜上に保存しようとする意図が読み取れた。それにくわえ保存するだけでなく、五線譜化の過程で得たであろうめりやす曲の特徴が会議の場で発表されるなど、五線譜化を基盤とした調査研究が実際におこなわれていた。また古曲と代表曲を五線譜化するにあたっては、五線譜化の前段階において、どの長唄曲を五線譜化するのが妥当かといった調査研究的な要素をもつ議論が重ねられていたことを確認した。また、京都在住の津田タミの演奏の五線譜化、同名異曲の五線譜化については、それぞれ長唄の伝播と音楽の変容を認識する、各種目の音楽的特徴を抽出するといったねらいがあったと考察した。

これらのことより長唄の五線譜化は、既存の曲を五線譜化するという保存の特徴のみを有する事業ではなく、五線譜化の前後の過程において調査研究の要素をも含んだ事業であったことが結論づけられた。つまり邦楽調査掛にとって五線譜化は、調査や保存の一手段であり、五線譜をもちいた長唄の研究、ひいては日本音楽全体の研究をめざしていたとかがえられる。

ただ、五線譜化のその後に、調査や研究のこころみがあったことは認められたものの、「メリヤスの研究」以外には、明確な結論を見出すことはできなかった。計画は練られていたものの、当時の音楽学的な研究レベルでは、結果を導き出すまではいたらなかったのではないかと推察する。それがゆえに、五線譜化は保存事業だととらえる意見が大勢をしめていたのであろう。しかし邦楽調査掛による長唄の五線譜化は、研究の足がかりとなる貴重な資料を提供したという点において、当時としては十分先駆的であったし、結論が見えてこないことで調査研究の側面が見落とされてはならない。そして今後は日本音楽研究における五線譜利用の可能性も含め、再評価されるべきであろう。

むすび

邦楽調査掛における長唄五線譜化の実態調査によって、以下のことがあきらかとなった。邦楽調査掛に嘱託員として任用された長唄演奏家は総勢8名で、そのうち五線譜化に協力したのは、五世杵屋勘五郎、二世今藤長十郎、三世杵屋六四郎の3名である。そのほか嘱託員以外の演奏家として、京都先斗町に住む津田タミ（杵屋君繁）の協力も得ていた。また邦楽調査掛に所属した記譜者12名のうち、10名が長唄の五線譜化に関わっていた。それらのスタッフによって支えられた長唄の五線譜化においては、合計57曲が五線譜化され、現存する長唄の五線譜が44曲78種、現存しないが五線譜化された長唄曲が13曲あることを指摘した。

このように長唄の五線譜化は多くの成果をあげたのだが、それらは単なる五線譜への採譜作業ではなく、五線譜化を中心とした長唄の調査研究という一連のながれのなかでとらえるべきものだと結論づけた。

邦楽調査掛による五線譜化の事業全体に対してさらなる評価を与えるには、五線譜化と関係のある他の事業との関連も意識するべきだろう。たとえば『近世邦楽年表』、蠟管録音、演奏会など、長唄がかかわった事業と五線譜化との関連をさぐることで、邦楽調査掛がめざした長唄に関する調査研究の全体像がみえてくるようにおもわれる。そして本稿においてあきらかとなった長唄五線譜化の実態を基盤としながら、五線譜そのものへのアプローチを増やすなど、さらに研究をすすめてゆきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたっては、長唄の稀曲に関して稀音家義丸師に、また津田タミに関する資料の調査方法については廣井榮子氏にご教示いただきました。ここに感謝の意を表します。また本稿は、日本音楽学会第60回全国大会での研究発表および、東洋音楽学会第62回大会での研究発表の一部をもとに加筆・修正したものです。

注

- 1 富本節、一中節（都派・菅野派）、平曲、清元節、長唄、河東節、半太夫節、外記節、能楽、箏曲、常磐津節、新内節、京歌、雅楽、薮八節、荻江節、民謡の17種目（百年史2003：696-701）。
- 2 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』は、本稿でもっとも引用の多い文献である。本来なら引用の際、（東京芸術大学百年史編集委員会；財団法人芸術研究振興財団編2003）とすべきところだが、文中の流れを重視し（百年史2003）と略記する。
- 3 大正9年度の調査報告において、劇場用の方は「累計約二百余种」の五線譜ができあがっているとされている（百年史2003：606）。
- 4 明治40（1907）年から昭和3（1928）年までの五線譜採譜の様子を記した作業記録。全22冊。このうち大正5（1916）年から昭和2（1927）年までの12冊は東京芸術大学附属図書館貴重資料データベースで閲覧可能。（薦田1982：31）、（寺内2003：20）、（蒲生2007：20）参照。本稿で使用する日誌は、蒲生がいうところの「日誌B」であり、ほかに関係者の出欠などを記した一般的な日誌「日誌A」（全12冊）もある。
- 5 明治40（1907）年から大正14（1925）年までの邦楽調査掛関係者の捺印による出勤記録。全19冊。（蒲生2007：20）参照。
- 6 五線譜化された楽曲名を種目別に記したもの。全1冊。長唄曲の掲載は28曲。（薦田1982：32）参照。
- 7 前出の「邦楽外題」よりも詳細に採譜曲に関する事柄が書き込まれたもので、曲によっては採譜開始日や浄書完了日などの情報あり。冊子名に「調査済」とあるが、調査を終えた曲ばかりが記載されているわけではなく、年度ごとの調査曲目の報告書という意味合いが強い。全3冊。うち2冊はほぼ同じ内容のものだが、1冊はより多くの書き込みがなされたもの。長唄曲の掲載は49曲。（薦田1982：32）参照。
- 8 六合新三郎については、『百年史』内に世代の混乱がみられる。「関係者一覧」（百年史2003：747）や、「採譜」の項目（百年史2003：698）には五世、「東京音楽学校職員一覧および在職年表」（百年史2003：1573）には「六世」とある。現在は六世六合新三郎が通例となっているため（たとえば（小林1989：774）、（倉田：藤波1995：1015）など）、本稿においては六世で統一する。
- 9 大正3（1914）年1月21日の「日誌」には、「今般本掛にて記譜者募集し応募者なる小原知孝、竹内鉦三、茂木朝磨の三氏昇校せり」とあるため、記譜応募者は3名であったことがうかがえる。
- 10 先行研究のある平曲と雅楽について五線譜化にかかわった記譜者を整理しておきたい。平曲において当初は、三宅延齡、榎田倉之助、本居長世の3名が採譜をおこなっていたが、その後平曲の演奏家囃子員である館山漸之進（1845-1916）のメガネに変わったのが楠美恩三郎一人であったため、結果として記譜を一任されるかたちとなっていた。また雅楽については、弘田龍太郎と兼常清佐（1885-1957）が採譜にあたったが、演奏家囃子員として登用された楽人たちが演奏と五線譜化の両方を担当する場合もあった。
- 11 東京芸術大学に保管されている五線譜は現在、同大附属図書館のホームページ内の、貴重資料データベースとして一般に公開されている。五線譜は同大のほかに、記譜者の弘田龍太郎によるものが、明治学院大学図書館付属日本近代音楽館（旧名は日本近代音楽館）にも所蔵されている（百年史2003：696）。

- 12 表1における「めりやす」20曲は、「掲載書」にしるしたいいずれかの資料において、邦楽調査掛がめりやすと記載していた曲である。
- 13 長唄以外の曲としては、河東節、富本節、常磐津節、一中節がある（百年史2003：718）。

参考文献

- 乙骨三郎 1912 「日本音楽の将来」『音楽界』5巻3号、51。
- 蒲生郷昭 1976 「俗曲改良と『箏曲集』」東京芸術大学音楽取調掛研究班編『音楽教育成立への軌跡』149-267、東京、音楽之友社。
- 蒲生郷昭 1986 「音楽取調掛における長唄詞章の改良について」角倉一郎；高野紀子；東川清一；渡部恵一郎編『音楽と音楽学—服部幸三郎先生還暦記念論文集—』173-204、東京、音楽之友社。
- 蒲生郷昭 2007 「東京音楽学校邦楽調査掛での兼常清佐」蒲生美津子『近代日本における音楽観 兼常清佐を中心に』平成17～18年度文部省科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書、19-44。
- 稀有家義丸 1993 『長唄資料 めりやす集』、東京、邦楽社。
- 金田一春彦 1983 『十五夜お月さん 一本居長世 人と作品—』、東京、三省堂。
- 倉田善弘；藤波隆行 1995 『日本芸能人名事典』、東京、三省堂。
- 小林責 1989 「六合」平野健次；上参郷祐康；蒲生郷昭（監修）『日本音楽大事典』773-774、東京、平凡社。
- 薦田治子 1982 「邦楽調査掛平曲五線譜の成立をめぐる」『東洋音楽研究』第四十七号・第一分冊；、21-48。
- 塚原康子 2008 「邦楽調査掛関係資料の調査について」大角欣也（研究代表者）『近代日本における音楽専門教育の成立と展開』平成17～19年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、76-110。
- 寺内直子 2003 『近代日本における伝統音楽の再認識～雅楽の五線譜化をめぐる～』平成12～14年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C）2）研究成果報告書。
- 東京芸術大学百年史編集委員会；財団法人芸術研究振興財団（編）2003 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』、東京、音楽之友社。
- 中神鹿城（編）1910 『鴨川をどり 先斗町細見』、京都、八坂浅次郎。
- 中神直三郎（編）1931 『技芸倶楽部』9巻1号、京都、技芸倶楽部社。
- 弘田龍太郎 1927 「邦楽研究の必要と其の方法」東京音楽学校校友会編『音楽』、7号、1-6。
- 無記名 1910 「邦楽調査掛近況」東京音楽学校校友会（編）『音楽』1巻2号、26-27。
- 湯原元一 1908 「邦楽調査に就て」『音楽界』1巻2号、11-14。
- 湯原元一 1911 「邦楽調査掛記事」東京音楽学校校友会編『音楽』2巻1号、55-57。
- 吉田晴風 1921 「邦楽問題三種」『音楽界』通巻251号、2-5。

表 1 調査結果

曲名	現存の有無 (点数) *1	筆者調査の結果			掲載書*3	備考
		演奏家	記譜者*2	五線譜化開始年 五線譜化完了年		
明の鏡	有 (3)	五世若屋勘五郎	林、*三宅、鎗田	明治40年11月 明治41年3月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
壽	有 (2)	五世若屋勘五郎	林、三宅、鎗田	明治40年11月 明治41年3月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
高尾 (もみじば)	有 (2)	五世若屋勘五郎	林、*三宅、鎗田	明治40年11月 明治41年3月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
黒髪	有 (2)	五世若屋勘五郎	林、三宅、鎗田	明治40年11月 明治41年3月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
五大力	有 (1)	五世若屋勘五郎	*三宅、鎗田	明治40年11月 明治41年3月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
猫の妻	有 (2)	五世若屋勘五郎	林、三宅、鎗田	明治40年11月 明治41年3月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
びんづる	有 (2)	五世若屋勘五郎	三宅、鎗田	明治40年11月 明治41年4月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
四ツの袖	有 (1)	五世若屋勘五郎	林、三宅、*本居、鎗田	明治40年11月 明治41年5月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
きしょう	有 (4)	五世若屋勘五郎	三宅	明治40年11月 明治41年6月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
宝船	有 (3)	五世若屋勘五郎	*林、三宅、鎗田	明治40年11月 明治41年3月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
小夜千鳥	有 (4)	五世若屋勘五郎	林、*三宅、*本居、鎗田	明治40年12月 明治41年5月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
八重霞 (新むらさき)	有 (1)	五世若屋勘五郎	*三宅、*本居、鎗田	明治40年12月 明治41年5月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
ゆかりの月	有 (1)	五世若屋勘五郎	*林、三宅、本居、鎗田	明治41年5月 明治41年6月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
三勝道行	有 (1)	五世若屋勘五郎	*林、本居	明治41年6月 明治41年12月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
雉 (羽根の雉)	有 (1)	五世若屋勘五郎	*林、本居	明治41年6月 明治41年12月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
松の緑	無	五世若屋勘五郎	初世若屋五三郎	明治41年6月 明治41年12月	採、報、日、外、済	
京鹿子娘通成寺	有 (部)	五世若屋勘五郎	竹内、林、三宅、本居	明治41年10月 明治44年7月	塚、採、報、日、外、済	
初しぐれ	有 (1)	五世若屋勘五郎	三宅、本居	大正1年11月 明治42年3月	塚、採、報、日、外、済	
英軟着獅子	有 (2)	五世若屋勘五郎	*林、*本居	明治42年1月 明治42年7月	塚、採、報、日、外、済	
櫻狩	有 (2)	五世若屋勘五郎	林、*本居	明治42年1月 明治42年7月	塚、採、報、日、外、済	
初子の日	有 (1)	五世若屋勘五郎	三宅、本居	大正4年6月 大正5年12月	塚、採、報、日、外、済	
老松	有 (1)	五世若屋勘五郎	弘田	昭和3年3月	塚、採、報、日、外、済	
七福神	無	五世若屋勘五郎	*林、本居	明治42年2月 明治42年6月	塚、採、報、日、外、済	
勧進帳	有 (部)	五世若屋勘五郎	弘田	昭和3年1月	塚、採、報、日、外、済	
菊の露	無	五世若屋勘五郎	*林、三宅	明治42年3月 明治42年4月	塚、採、報、日、外、済	
新むらさき	有 (1)	五世若屋勘五郎	林	明治42年3月 明治42年4月	塚、採、報、日、外、済	
菊壽の草摺	有 (2)	五世若屋勘五郎	林	明治42年3月 明治42年9月	塚、採、報、日、外、済	
末廣狩	有 (3)	五世若屋勘五郎	竹内、林、三宅、本居	明治42年9月 明治43年6月	塚、採、報、日、外、済	
		五世若屋勘五郎	本居	大正2年11月 大正2年11月	塚、採、報、日、外、済	
		五世若屋勘五郎	北村	大正8年5月 大正8年5月	塚、採、報、日、外、済	
		五世若屋勘五郎	本居	明治42年10月 明治42年10月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
		五世若屋勘五郎	*三宅、本居	明治42年11月 明治42年12月	塚、採、報、日、外、済	ありやす
		五世若屋勘五郎	*三宅、本居	明治42年12月 明治42年7月	塚、採、報、日、外、済	
		五世若屋勘五郎	*三宅、本居	大正5年3月 大正5年7月	塚、採、報、日、外、済	
		五世若屋勘五郎	竹内、*三宅、本居	明治43年1月 明治44年5月	塚、採、報、日、外、済	
		五世若屋勘五郎	弘田	昭和3年2月 昭和3年2月	塚、採、報、日、外、済	

曲名	現在の有無 (点数) *1	筆者調査の結果		掲載書*3	備考
		演奏家	記譜者 *2		
多摩川	無	五世若尾勘十郎	明治43年4月	採、日	「さらしの合方」のみか
童子戯面被	有(2)	二世今藤長十郎 小原、三宅、*本居	大正2年11月	塚、採、報、日、済	
鶯娘	有(1、部)	二世今藤長十郎 本居	大正3年3月	塚、採、報、日、済	めりやす
白砂	有(1)	二世今藤長十郎 本居	大正3年6月	塚、採、報、日、済	
東金	有(2)	二世今藤長十郎 三宅	大正3年6月	塚、採、報、日、済	めりやす
様に逢て	無	二世今藤長十郎 弘田	昭和3年1月	塚、採、報、日、済	
初咲法楽舞	有(1)	二世今藤長十郎 弘田、三宅、本居	大正3年7月	採、日	外、外、済
範頼道行	有(2)	二世今藤長十郎 三宅	大正4年1月	塚、採、報、日、外、済	
御代の秋(二人翁)	有(3)	三世若尾六四郎 (不明) 弘田	大正4年4月	塚、採、報、日、済	大正4年10月 昭和2年9月
月の頁	有(1)	二世今藤長十郎 三宅	大正4年10月	塚、採、報、日、済	
鞭鞭字佐幣	有(2)	三世若尾六四郎 本居	大正5年2月	塚、採、報、日、済	昭和2年7月
高尾鷹梅	有(2)	二世今藤長十郎 二世今藤長十郎 弘田	大正5年4月	塚、採、報、日、済	
正札附根元草摺	有(2)	三宅、本居 弘田	大正5年11月	塚、採、報、日、済	昭和3年1月
枕獅子	有(2)	三宅	大正6年1月	塚、採、報、日、済	
心算の秋の月	有(2)	三宅 弘田	大正6年4月	塚、採、報、日、済	昭和3年2月
乱菊枕慈童	有(1)	津田タミ	大正6年5月	塚、採、報、日、済	
常盤庭	有(1)	津田タミ	大正6年5月	塚、採、報、日、済	大正7年10月
寂入娘	有(1)	津田タミ	大正6年5月	塚、採、報、日、済	
鶴亀	無	二世今藤長十郎、六世六合齋三郎 北村	大正8年5月	報、日、済	大正8年5月
吉原八景	無	二世今藤長十郎、六世六合齋三郎 北村	大正8年5月	報、日、済	
吉原雀	無	二世今藤長十郎、六世六合齋三郎 北村	大正8年6月	報、日、済	昭和2年12月
連獅子	無	二世今藤長十郎、六世六合齋三郎 北村	大正8年10月	報、日、済	
傾城道成寺	有(1)	二世今藤長十郎 前田、梁田	大正9年5月	塚、採、報、日、済	大正9年6月
雛鶴三番叟	無	二世今藤長十郎 北村	大正11年3月	採、日	
童獅子	有(1)	二世今藤長十郎 弘田	昭和2年4月	採、日	昭和2年4月
えびす	無	現段階では不明のまま	百	採、日	
「ばんざいせんしうまいおさめ……」	有(1)	現段階では不明のまま	塚	百	めりやす

(筆者作表)

※1 有(部)は、曲全体が五線譜化されたものの、部分的にしか現存していないという意味

※2 *を付けた記譜者は、その曲の五線譜化をおこなったことが確認できた人物

※3 塚：塚原資料、採：「百年史」内「採譜」の項目、日：日誌、外：邦楽外題、済：調査済外題目録

Transcription of Nagauta into Staff Notation by Hogaku Chosa-gakari The Actual Conditions and the Revaluation of the Project

OKUBO Mariko

Hogaku Chosa-gakari (1907 – 1943?) is a governmental organization established for investigation and documentation of Japanese music. Though the outline of its projects could be grasped by “The Centennial History of Tokyo National University of Fine Arts and Music”, more studies are necessary to understand the specific projects minutely. Therefore, this thesis focuses on the transcription of Nagauta songs into staff notation which has not been investigated so far. First, this paper clarifies the actual conditions of the projects such as Nagauta songs which were transcribed into sheet music and personnel involved in the transcription.

Second, this paper reconfirmed the revaluation of the project. As a result of research of the transcription of Nagauta songs by studying archives, it was found out that the project aimed not only for the transcription of Nagauta songs into staff notation but also for the investigation of Nagauta songs based on staff notation.

Keywords: part-time staff, TSUDA Tami (KINEYA Kimishige), Meriyasu